

名古屋の街と博覧会

— 都市発展の軌跡 —



池田 誠一

【11】愛・地球博…都市圏の節目

1 環境の万博へ

20世紀後半の国際博はテーマが重要視されました。とくに21世紀の国際博には、人類に共通する地球の規模の課題解決のためのテーマが求められるようになったのです。

愛知万博では、昭和63年の誘致運動のスタートの時から数えると4回テーマが選定されています(図1)。最初に考えられたのは、平成3年の「技術・文化・交流—新しい地球創造—」です。なにか絞られていない印象があります。この案はしばらく続きましたが、7年に「自然」という言葉が加わります。そして8年になってBIE(博覧会国際事務局)に開催申請をする段階に、国の委員会やワーキンググループで再検討されました。その中で、

「自然・文化・技術の交流」とされていたところが「自然の叡智」にじぼられました。位置づけもサブテーマからメインテーマの一部に変わっています。このころから、難しい「自然の叡智」という言葉がマスコミによって要約され、「環境万博」と呼ばれるようになったのでしょう。そして最終案になるBIEへの登録申請では、テーマは、シンプルに「自然の叡智」だけになったのです。

今回は、このようなテーマを掲げた愛知万博がどう展開され、地域にどのような意味をもたらしたかを考えてみたいと思います。

2 新しい万国博

(1) グローバル・ループの知恵

会場の主体を海上地区から青少年公園に移しても、やはり難問はありました。公園には50mという高低差があったのです。もしこの高低差に改変を加えずに会場計画を作ると、膨大なエスカレーター・エレベーター

	時 期	テ ィ マ 案	契 機
1	平成3年	技術・文化・交流 —新しい地球創造—	基本問題懇談会提言
2	平成7年	新しい地球創造 —自然・文化・技術の交流—	予備調査検討委員会報告
3	平成8年	新しい地球創造：自然の叡智	BIEプレゼンテーション (カナダ等との競合で)
4	平成12年	自然の叡智	BIE登録申請(確定)

図1 愛知万博のテーマ案の変遷

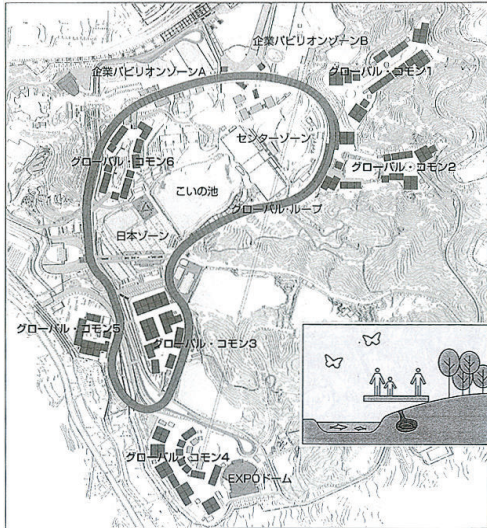


図2 会場内の「グローバル・ループ」

ターが要ることになりました。とてもそのムダと経費には耐えられません。

そこに考え出されたアイデアが「グローバル・ループ」です。これは、ほぼ水平な空中回廊と云えるもので、会場内に大きく幅20m程度のループを巡らしました(延長2.6km。図2)。そして参加国のパビリオンはそこから出入りすることにしたのです。これによって、①バリアフリー、②会場全体の分かり易さ、③空間の立体利用等が大きく前進することになりました。またその回廊には間伐材を活用し、環境的にも優しいものになりました。そして会場は、逆に高低差が生きることになり、環境万博にふさわしく、水と緑の多い空間を確保できたのです(図3)。

(2) 博覧会の成果

愛知万博は、平成14年、「愛・地球博」という愛称がつけられました。(ちなみに正式名称は「2005年日本国際博覧会」、「愛知万博」は略称です。)

工事の着手が遅れた博覧会は、突貫で準備が進められ、17年3月25日、無事開会することができました。

最初のうちは入場者も低調でしたが、次第に人気が出て、尻上がりに増え、9月25日の閉会までに、目標の1,500万人をはるかに超える2,204万人の入場者を記録することになりました。



図3 愛知万博・長久手会場(文献①)

た。このため事業面でも多くの収益をあげる
ことになり、経済波及効果も関連事業を含め、
7兆7千億円とされました。このように、愛
知万博は当初の予想を裏切って、大成功と評
価されて閉会を迎えることができたのです。

この博覧会がこれまでの博覧会に比べて評
価されたところは、①最新技術の有効性の体
験などテーマの忠実な実施。②NPO/NGO、市
民団体の出展、市民ボランティアの活躍など、
市民レベルの参加。③「日々改善」による安
全と運営面の徹底です。これらによって、新
しい21世紀の国際博の方向を示すことがで
きたといえます。

そして異例のことですが、会期内の6月、
パリのBIE総会で、愛知万博に対し「祝意と
賛辞」の宣言文が採択されたのです。

(3)母都市・名古屋

さて、この連載のテーマである名古屋市は、
この博覧会に対してどう行動し、どのような
影響を受けたのでしょうか。

市域外の会場とはいえ、名古屋市は博覧会
の主催者の主要なメンバーとして、資金の拠
出、人材の派遣、会場への出展と主体的に参
加しました。

しかしそれだけではありません。市には、
博覧会のゲートウェイにある母都市としての
役割がありました。このため市は、(前回少し
紹介した)名古屋駅南の笹島地区を活用して、
「ささしまサテライト事業」を行いました。目
的は、①ウエルカムゲートとして、
②市民参加で名古屋のパワーをみ
せ、③新しい都心としての賑わい
を実験創造する、というものです。
そして、博覧会の会場情報の提供
や会場へのバスアクセスの基地と
して、会期中に351万人が集まり、
博覧会の歓迎ムードを盛り上げま
した。もちろん他の地域でも来場

者の歓迎と名古屋の魅力のアピール(新世紀
名古屋城博など)等を行い、街中の歓迎ム
ードを盛り上げたのです。そして名古屋の街に、
にぎわいと活気をもたらすことができました。

3 紀行 愛・地球博記念公園

… 博覧会の継承？ …

それでは愛知万博の主会場跡を歩いてみま
しょう。青少年公園は、博覧会の前にいつ
たん閉園され、博覧会の後、再整備されて、
「愛・地球博記念公園」としてオープンしたも
のです。

〈東側から〉

地下鉄の藤が丘駅を降りて、愛知万博に合
わせて開業した、常電導磁気浮上式の鉄道、
「リニモ」に乗ります。愛・地球博記念公園駅
を降りると目の前が博覧会会場跡です。

駅前広場を進み、広い東西の歩道に出ます。
この道が、グローバル・ループ(以下、ループ)
だった道です。この辺りは標高が高いので地
表でした。左に進みます。この北側には、人
気の企業パビリオンがあり、そこだけはいつ
も長い行列が見られました。その奥、トンネ
ルの向こうが東ゲートでした。

緩やかに下ると右側は中央の芝生広場です。
イベントが開かれ、多くの人が休んでいまし
た。右にカーブします。その左側の谷間には
グローバル・コモン(以下、コモン)の①、続



グローバル・ループの跡の歩道



会場の中央広場の跡



こいの池。夜のショーは多くの人を集めた

いて②が枝のように伸びていました。右手の大きなスケートリンクの建物を過ぎると、こいの池が見下ろせます。ここでは、夜のイベントが華やかでした。池の向こうには名古屋市館の黒っぽい万華鏡の塔が立っていました。

西口の休憩所、愛知県館跡の手前で左に曲がります。右手に池を見て進むと日本庭園です。この一帯はそのまま残されています。茶室を見て右に入ると、人気だった「サツキとメイの家」。ここも残されており、今も人気



残された「サツキとメイの家」

です。右に、それを展望する塔に上り、次に西方向の遊歩道を進みます。林の中を抜け、階段を下り、池を渡ると大きな野球場に出ます。
〈西側へ〉

この3面の野球場と右手の駐車場まで含む広い空間の中に、左にはイベント用のEXPOドーム、右一帯にコモン④がありました。

その北の端に行くと、200m程ですが、博覧会の時のループが残されていました。時間が経って錆が目立ちますが、懐かしい橋です。ループは、左側は断ち切れていますが、その先は、今は公園外です。博覧会の時は高架構造で、その先のコモン⑤はビル構造になっていたようです。残されたループを右に進むと左側にある野球場がコモン③です。ここはヨーロッパのパビリオンが並び、有名なレストランもありました。

西側のループを追うため、その野球場の手前で左に坂を下ると公園の周回道路に出ます。



一部に残された「グローバル・ループ」



会場西側を北に向かう。
左側がサイクリングロードになっている



グローバル・コモン6の跡と説明板



西側の企業パビリオン用地は駐車場に。
左にリニモの駅が見える

右に曲がるとサイクリングロードと併行して北に進みます。道は公園西口からの道路橋を渡る手前でループのルートになります。博覧会の西ゲートはその北で、通路は右側の細い池を横断していました。ループはその上の高さにあったこととなります。

少し進むと上り坂になり、丸い休憩所のある空間に出ます。この辺りがコモン⑥。博覧会の時は、アジア・オセアニアのパビリオンがあったと、説明板がありました。ループは左側を通っていましたが消えています。花の広場に変えられた坂道を上ると、上りきった左側は広い駐車場になっています。ここが西側の企業パビリオンが並んでいた所です。道はループの道と合流して、スタート地点に戻ります。

公園内では、新しい環境技術が試行された

り、環境教育の場がつくられて、博覧会を継承しようという試みがありました。しかし、やはりイベントが終わり元の姿に戻されると、その記憶は消えてしまうようでした。

4 地域の節目

愛知万博と併行して事業が進められていたのが中部国際空港です。そして博覧会開会の6日前という絶好のタイミングに開港し、博覧会来場者のアクセスに貢献しました。それに合わせて、空港から博覧会会場をつなぐ高速道路(伊勢湾岸道路と東海環状自動車道の半分)が完成しました。博覧会や空港への都心からのアクセス手段も整備され、2005年は博覧会を節目に、この地域の広域交通基盤は大きく充実することになったのです。

博覧会等の大きなイベントは、地域の活動に「節目」をつくることとなります。せっかく博覧会をして多くの人が集まるなら、それに合わせようとする心の動きです。愛知万博には、大阪万博のような関連公共事業は設定されませんでした。やはりそれに合わせようという傾向が出ます。公共事業だけではありません。民間の活動も、さらには個人の行動も、心の中に、「万博があるから…」という動きが出てくるようです。

名古屋地域は、21世紀という新しい時代の初めに大きな節目となる博覧会を開催することによって一とりわけ「環境」と「交通」という分野で新しい発展の足がかりをつくることのできたのではないのでしょうか。

〈主な参考文献〉

- ①『2005年日本国際博覧会公式記録』
(2006、財2005年日本国際博覧会協会)
- ②『「愛・地球博」名古屋市公式記録』
(2006、名古屋市総務局国際博覧会推進室)